

教育学科創立50周年記念特集

教育学科の50年を振り返り、未来を展望する

2012年11月3日 於 ライフスナイダー館レセプションルーム

上田薫, 中野光, 寺崎昌男, 藤田昌士, 松平信久, 有本真紀, 前田一男
UEDA, Kaoru NAKANO, Akira TERASAKI, Masao FUJITA, Shoji MATSUDAIRA, Nobuhisa ARIMOTO, Maki MAEDA, Kazuo

教育学科の発足とアイデンティティ

前田 上田先生、中野先生、寺崎先生、藤田先生、松平先生と、教育学科を支えてくださった先生方にお集まりいただき、50周年の記念の座談会を開けることをとても嬉しく思っております。現役からは有本学科長と司会をさせていただきます前田が参加させていただきました。よろしく願います。

教育学科の50周年記念の座談会と銘打ちしましたが、いづれも、いつ頃を教育学科の出発点にするかは、いろいろ議論があると思います。1949年に新制大学となったところで心理教育学科が設置されていて、それから数えると60数年になります。心理教育学科に初等教育課程の設置が認められた1955年から考えますと、57年が経っております。今日は、心理教育学科が心理学科と教育学科とに分かれた1962年からみての50周年として、この座談会を開かせていただいています。

そのような歴史の中で、教育学科というアイデンティティは、いつ頃、どのようにしてできてきたのか、松平先生自身はどのようにお考えでしょうか。

松平 学科として独立するのは、今お話にあった

ように1962年ですけれども、その前の心理教育学科のときから、教育学専攻の4名の先生方のあいだには、ご自分たちのアイデンティティは教育学にあるという意識がおりだったと思うんですね。そういう意味では、教育学科の萌芽はすでに形成されていたと思います。

1962年の教育学科の独立には、いくつかの要因があったと思います。一つは、心理教育学科が「心理学に裏づけられた教育学、教育学に支えられた心理学」というモットーで出発しましたが、事実上それはなかなか難しかったのではないかと思います。当時、心理学科は産業心理学を主としていましたから、教育に対する関心はどうしても薄かったように思いますし、心理学専攻の学生が多かったので、教育学のほうは傍流という位置づけだったのではないのでしょうか。ですから教育学専攻の先生方もどこか燃焼しきれないところがありだったと推測します。それからもう一つ現実的な問題として、だんだん教職課程の履修者が増えてきて、心理教育学科の体制では対応しきれなくなったということもあったようです。それで教育学科を立ち上げようということでお出されたのだと思います。

前田 1955年に、心理教育学科に心理教育学専攻

課程と初等教育専攻課程が置かれることになりました。初等教育課程は教育学科の一つの伝統かと思いますが、やはり設置当初から初等教育課程の位置づけは、かなり強く意識されていたのでしょうか。

松平 学科としては、それはなかったと思います。初等教育課程ができた背景には、立教小学校や立教女学院小学校など、聖公会系の四つの小学校の教員確保という問題が関係していました。とくにキリスト教的な背景をもった大学出の教師が欲しいということで、当時立教小学校の主事をしておられた有賀千代吉先生という方が中心となって「ぜひ立教にそういう課程を作ってほしい」と呼びかけ、大学当局と学科を動かしたという経過がありました。

ですから心理教育学科自体の発足のアイデンティティのなかに、初等教育を学科にきっちと位置づけようという意図がはっきりあったとは考えられないのです。

前田 1962年に教育学科として独立する時にも、教育学課程と初等教育課程を合わせた定員30名で発足するのですが、初等教育課程が一つの大柱として位置づいてくるのはこの頃からでしょうか。

松平 そうですね。とくに山本晴雄先生という当時の学科長が、「国立の教員養成課程にはない、立教独自の教員養成をする必要がある」と強調されておられて、学科発足にともなって位置づけがはっきりしていったと思います。

それからちょっと逆説的ですが、やはり弱小課程であったので、大学当局としては必ずしも初等教育課程を積極的に育てようという意識はなかったのです。山本先生はそれに対して非常に危機感をもたれて、立教なりの教員養成の大切さを強調されていました。そういう一種の反骨精神がかえって初等教育の位置づけを明確にしたこともあるかもしれません。学科独立の当初も初等教育課程の専攻者は、それほど多くはなかったのですが、徐々に増え、学科のなかでも研究や教育の柱の一つとして重要視されるようになりました。

教育学科の拡張期

前田 学生定員が30名だったのが、1967年には倍の60名になっていきます。教育学科あるいは大学全体が拡張していき、教育学科も学生定員を増やしていくのですが、そのあたりで何か特徴的な変化は、ありましたでしょうか。

松平 発足して倍増する時期まで5年ですか。それまでは30名でしたから、ほんとに家族みたいな感じで小規模な学科だったのです。学科定員の増大期は高等教育の拡張期に当たります。大学全体としても大きくなる時期で、その一環としての拡大だと思います。またそれと前後して大学紛争に突入しますから、学科がいろんな意味での試練にさらされた時期でもあったわけです。

前田 当時、教職課程と教育学科が一緒だったり、あるいは分離したりしていたのですが、教育学科と教職課程の役割分担は意識されていたのでしょうか。

松平 学科が発足したとき、実際上は教職課程と一緒にでした。発足直後に室俊司先生が教職課程専任として赴任されたのですが、室先生は当初は学科所属というか、一緒に活動しておられましたから、本当に一体となっていました。けれども1967年に学校・社会教育講座ができたときに、教育学科と教職課程が分離したのです。

前田 室俊司先生が教職課程の専任から教育学科の専任になられたのは1969年です。

松平 室先生が着任されたのは、学科が発足したつぎの年、1963年です。1963年に着任されて、教職課程が独立したときに教職課程に移られましたが、ちょうど大学紛争の起きた年に、佐々木剛先生と交代する形で、また学科のほうに戻られました。

前田 室先生が復帰された年を境に、といいますか、大学紛争という、それこそ立教にとっても、文学部にとっても、そして教育学科にとっても、非常に試練の数年間が続くのですが、上田先生はそのときにちょうど立教に赴任されてきましたね。

上田 僕が立教に来たのは1972年ですから、文学部の紛争はもう片づいていたんです。しかし大

学レベルでの紛争は小出しにまた次つぎと出てくる、授業料値上げ反対というテーマです。だから文学部の紛争とはちょっと性格が違うと思うのです。

僕が立教を認識するようになったのは、1967年に立教で開催された日本教育学会の大会で司会を務め、そこで山本晴雄さんと知り合ってからです。そのときに山本さんから立教に來いっていわれましたが、私は当時まだ名古屋大学にいました。その後東京教育大に移ってから、じつは2年ばかり立教の大学院で教育哲学の授業もしたりしていたのですが、肝心の本務のほうは筑波大学紛争になって大騒ぎして喧嘩して出てくることになるんですね。そのときに立教の話が生きたのです。

立教にきたら、評価のことをテーマに、授業拒否みたいな状態になっていて、細谷さんや沢田さんといった先生たちはみんな君子でおとなしいですから、相当いじめられていたわけですよ。文学部のなかでも、教育学科はちょっと苦しい立場にありましたね。紛争の残りは、教育学科だけにあったんですよ。

寺崎 ちょっとすみません。紛争のところに入る前に、ほかのことをちょっと補わせてください。

今まで話題になった、心理学と教育学の統合、統合した上での独立、学科のアイデンティティ、学科の成立、初等教育課程といった問題は、教育学科15周年記念の座談会でも議論されているのですよ。学科発足の頃おられた先生方は、初等教育課程があるのは非常に重荷だといわれていました。教員の人数が多くない時期、初等教育課程があることは、たぶん手に余るというくらいきつかったと思います。それが我々の頃（1974～79）には、教員の人数も増え、考え方も違ってきていたので、もうそうではなくなっていましたからね。

それからアイデンティティはどこにあったかについては、やはり子ども研究にある、と。心理学を方法として児童研究をやる、これが立教大学文学部教育学科の特色だと思っているというのが結論でした。その点が心理教育学科から分かれたことに影響していたらしいですね。

松平 初等教育に重荷を感じていたというのは事



上田 薫

実だと思うのですが、先生方のそれぞれの意識のなかでは、子どもを育てるという点では、非常に積極的な意識をもっておられたと思うのですよ。たださっきも言いましたが、大学の位置づけとか待遇は甚だ悪かった。設備なんかは今でも尾を引いていますが、貧弱もいいところですね。初等教育課程については、「折あらばつぶしてもいい」というような位置づけでしたから。「なくてもいい」という意見がしょっちゅう出ては引っ込みというのがしばらく続いていました。そういう意味での重荷ですよ。課程を育てたいという願いと実際の運営の難しさの板ばさみ状態です。

前田 浜田陽太郎先生が総長になられたとき、先生ご自身が教育学科の出身でありながら、経営の観点から私学には初等課程はやっぱり重荷だ、というようなことを率直におっしゃられていたことを今さらながら思い出します。基本的にはその構造みたいなものは今でも続いているのかもしれないね。

大学紛争と教育学科

前田 大学紛争のところに話を戻させていただきます。室先生から、大学紛争で議論された文学部の精神や教育をどう受け継ぐかについて、いろいろ

ろ話を聞いたことがあります。一つは、立教の紛争に機動隊を導入しなかったのが、文学部の誇りであると。また文学部教授会全体として紛争に向き合って、それ以降、文学部集会のように、学生をしっかりと研究・教育に位置づけながら、カリキュラム運営、文学部運営をしていった。これらのことが、紛争の経験の生かし方だ、これは他大学ではないことだと、室先生からいつも教えていただいていた。その紛争のまっただ中にいらした松平先生は、何か思い出などありますでしょうか。

松平 思い出だらけというか。1969年の大学紛争は、一応その年度内で大学全体としては収束しましたが、そのときに問われた「そもそも学問とは何か」、「人が人を教え評価するとは何か」などのテーマは、教育学の中身そのものでもあったので、制度的に解決できるという性格の問題ではなくて、学科内ではずっと尾を引いてきたと思います。

大学紛争の当時には、教育学科も散々苦労しました。草谷先生と室先生の二人で対応されて、崩壊寸前までいきました。その後5年くらいは学科独自の、教育学科紛争というものが続いていて、いつまで教育学科はぐずぐずしているのだと、文学部や大学からの厳しい批判の目もありました。その最中に上田先生が着任されたのでした。上田先生が来られて、学生と対応している姿を見て、非常に心強く、勉強させてもらったというのが実感でした。

上田 松平さんがそばで見えられたわけですね、何も言わないけどちょっと心強かったですよ。私はその前の筑波紛争でひどい経験をしていたので、立教の紛争は紛争のように見えない程度だったんですよ。ところが細谷先生、沢田先生、あるいは草谷さんもそういう紛争に慣れてないから、なかなかうまく対応できないようでした。それから僕は東京教育大をああいう形で辞めたので、学生たちに対しては割合有利な立場にあったと思うんです。学生たちだって見通しなくやっているのだから、止めるにやめられないような。だから自然に収まりました。

文学部の女子学生あたりが中心になり、学費値

上げと休講措置に絡んで、教育学科の女子学生がリーダーで6号館を乗っ取って大騒ぎになったことがあります。あのときも室さんと一緒に対応しました。機動隊を入れるか入れないかについて、本部のほうは入れると言っているのです。しょうがないから我々が突入しようということになって、突入しようと思ったら、その寸前に占拠していた学生が出てきたんですよ。偶然なのかどうかはわからないけど、よかったということになりましてね。寺崎 今おっしゃった事件は、1975年の春のことでした。私が来て1年が終わった、確か2月でした。まだ寒い時です。学部長室占拠に、何人入っているのかわからない。我々は、6号館の下でどうしようかと模索していた。上田先生がおっしゃったように、本部のほうは、もう機動隊を入れようということでした。こちらもいいですよと傾きかけた。そしたら、ひとりの先生が「先生方、機動隊ってご存知でしょう、新しく来た先生方もご存知でしょうか」と言われる。「いったん来たら、もう我々のいうことは聞きません。向こうのロジックで、向こうの力で処理していくだけで、入ったら終わりですよ。学生たちをそういう力に渡すことになるんですよ、いいですか」って言われたのです。それでハッと気がついたという記憶があります。

上田 入学試験が迫っていたのです。だから大学本部は焦るわけですね。

寺崎 学部長室に誰が入っているかわからないわけですよ。あとで2階の窓から4名ほどが顔を出していた。全部で6名いたのかな。顔の見たのが全部、上田ゼミと寺崎ゼミの学生たちなので、びっくりしました。そのあとどうするか。あとの処置は大事ですからね。懲罰は当時していませんでしたが、お叱りはしなければいけない。2日後くらいに我々で話し合いをして、主任の上田先生から「あの行動は遺憾であった」という言葉を出すことにしました。幸い学生の顔も名前もわかっているんで、彼らにそれを告げて、おしまいになりましたよね。

上田 学科長だからなんとか言わなきゃいけないですよ、教授会でも。私としては学生に向かっ

でもうきわめて穏やかなことを言ったつもりだったんだけど、仏文科の連中なんかには割合にタカ派だって評価されてね。教授会への対応としては分がよかったけど、学生ももう文句は言わないというか、その力はなかったですね。あの辺で、とにかく一応、我々の立場を示したということにはなったから、まあまあ、終わりと。

寺崎 でも6号館1階に下りてくると、入口のすぐ右側に教育学科の読書室があって、そこはまだ占拠されているわけです。6号館入ってすぐ右でしょ。ここからが文学部というその右側がまだコントロールできていないわけです。それについては、一年待ったかな。とにかく変えました。それは非常に大きな変化でした。その辺から、紛争の影は6号館から消えていったんです。

前田 私が入学したのは1975年です。そのときは読書室を使えましたし、助手をされていた近藤弘さんが、新入生の歓迎コンパを河内学園でやる雰囲気になってきた一番最初の年度だったとよくいわれていました。1975年ぐらいがまた学科の一つの転機といいますか、変わり目だったのかなと、今、お話をうかがって思いますね。

上田 あの時、教育学科の学生だけがまとまっているわけではなかったと思います。今の6号館の問題も、うちの学生だけでやっているわけではない。うちの学生がちょっとリードしたということはあるけどね。学科、学部全体の問題であって、一応1975年というあたりがね、転機になると。うちの学生も、卒業式のときにその造反リーダーの女子が僕に花束くれたくらいですからね。言っている割に強いわけではないんですよ。ただちょっと、やってみたいというか、やらざるをえないというのがあって。ほかの大学と比べると、穏やかというかおとなしいというかね。

寺崎 機動隊を入れなかったという話に加えると、立教の場合、学生運動をやっている学生たちに言葉で対応したことが大きかったと思います。逃げなかったんです、機動隊という力で。それから学生たちから逃げ出すようなやり方では対応しなかった。やっぱり言葉で対応した。これはほかの大学にはあまりないことです。あの当時は、ミッ



中野 光

ション系の学校だから学生運動に対して寛容ということはまったくなかったですね。カトリック系の学校はそれこそ自分たちから大学を閉める。それから別のミッション系の大学ですけども、ジュラルミンの猛烈に高い壁を作って対応するとか、むしろ厳しかった。警備保障会社の人間だけがキャンパスを歩いているというようなミッション系の学校もあった。立教はその点違いましたからね。あの紛争の対応の仕方は立教の特色を表していると思います。

多様な教員と学問

前田 そういう最中に、寺崎先生が野間研究所からいらっしゃった。その前の年には浜田陽太郎先生がおみえになっています。浜田先生は、上田先生が立教へお呼びになったと聞いたことがあります。

上田 浜田君は、東京教育大の農学部にいたんですよ。筑波紛争もあったけれども、それと関係なく、「やめた」って辞めちゃったんですよ、大学に愛想を尽かして。辞めてもなんとかかなと思ったんでしょうけど、なかなか就職はうまくいかないんですよ。ちょうどそういうとき、僕は学科長

をやらされたけど慣れてないし、一緒になってやってくれる人が欲しいなって思って、だから彼にいったら、彼も割合二つ返事できたんですよ。始めはおとなしかったけど、だんだん……（一同笑）。そういうわけでたまたま彼も僕も筑波紛争でおん出たり出されたりしていたので、昔からずっと知っている仲良かった男ですから、自然にきてもらえたわけですね。

前田 長尾十三二先生も、上田先生が呼びに言った。

上田 東京教育大の人としては、浜田君はちょっとよそ者のだけけれども、長尾くんは一番の嫡出子でね、だけど立場上大学にはいられないということもあって、僕がいたからやっぱり彼は来たんです。紛争中にヨーロッパ留学をするとき自分の進退を託してくれたほど親しい仲だった。

寺崎 国立大学との関係という点では、当時からこんなふうに言っていました。それは学生たちのなかに、結構「東大嫌い」な雰囲気があると。大学紛争において東大は悪玉の一つですからね。東大と日大の二つのなかで最大の紛争が起きたでしょ。紛争にコミットしている学生から見たら、東大ってのはそもそもけしからんというのがあるわけですね。

その上、その東大から来た先生たちが、学科を作っていることにも、不安や不信があったようです。心理教育学科もほとんど東大出の先生たちです。ドクターコースまでの大学院が一挙にできるのも、東大の名誉教授を迎えてやっとできたんじゃないかと。いつまでうちの学科は東大の廃棄物をもっているのか、とまで言うような見方をしている学生たちもいました。

ですからそのなかで室さんは光っていたのだと思う。室さんはああいいうタイプだから、いわゆる東大系ではないことをぐっと強調してね。従来の東大系ではないので、学生たちとのあいだにコミュニケーションをつくれたのだと思いますね。

前田 室先生はいつも、立教の教員のスタッフの多様性、出身校の多様性をおっしゃっていました。また旧来のアカデミズムに対して、自分は違う批判的なスタンスを取っていると自覚的におっしゃ

ってもしました。

寺崎 僕はびっくりしました。立教にきてみたら、室さんが呆れるくらい立教ファンになっているんですね。なんでも立教、立教って。長尾さんが立教にこられるって決まったときに一番喜んでいたのは室さんだったんですよ。「これでよくなった」と、「立教はよそからもびっくりされているよ」って。「このあいだね、宮原誠一さんから、立教はいったい何を考えているんだと言われた」と相好をくずしていました。本当に彼は心の底から立教ファンでしたね。

1970年代の教育学科

前田 筑波紛争のあとで、流出した優れた人材が立教に集まったということと、大学紛争が収まってくることで軌を一にして、教育学科の充実期を迎えることになりました。その一つの転換のなかに寺崎先生が入ってこられる。

寺崎 それほど大げさなことじゃないですけど、要するに漂着した人間の一人です。漂流して、日本教育史専攻だったけれども大学史などのマイナーなところにのめり込んで、流れ着いたっていう感じです。立教にきてみて、びっくりしました。たとえば、よその大学でしたら、あの頃の私が新聞に書いたことは問題になると思うんですよ。というのは、筑波大学設置問題に対して私はきわめてクリティカルな論説を朝日新聞の夕刊に出した。今から思うと、あの論説はある意味で僕の将来を縛りましたね。あの人はそういう人だって。書いていることは嘘じゃないけどきつい。これはどこの回し者だという目で見られたんですよ。ところが立教の教授会では、それは全部プラスになった。まともだって。とっても驚きましたね。不思議な大学だなと思いました。

前田 最初に立教におられたのは5年間でしたよね。大学院の充実も含めて、一つの「黄金世代」を支えていただいたと思うのですが、当時の教育学科でここを重視しようという雰囲気はあったの

でしょうか。

寺崎 これは先生方、どうですかね。上田先生は僕がいたあいだ、学科の主任でいらしたでしょう。

上田 そうですね。僕は教育学者だけれども、教育現場にたくさん行っているし、つながりが深いんですよ。要するにアカデミックな学問の場よりうちの学生をそういうところに連れて行ったこととかね。だから僕にとっては初等教育課程があることは、とても大きな意味をもっていた。初等のほうに比重がかかると言っちゃ悪いけど、どうしてもそっちのほうに重心がかかるようにしていたな。そういうことは、ほかの大学ではなかなか難しいです。

やっぱり現場と密着していないと、たえず自然な形で学生が小学校や中学校に出入りすることをやっていないと、いい指導はできないですよ。学問の切れ端だけを見て歩くっていうのはだめなんです。そのためには、そういう指導者がいたほうがいい。僕の場合は自然にそういうふうになって、立教で忙しくしていました。長野県なんか1週間に2回くらい行っていましたからね。そのときに学生も行ったりするわけで、私にとってはそのほうがよかったし、初等教育課程にもよかったかもしれないですよ。まあ1980年代になると、僕も学会のことで忙しくなって、若干そういうことが少なくなったかもしれないですけど。だからやっぱり、1970年代が僕としては一番よかったんです。

寺崎 上田先生の「実践を離れて教育研究はない」「教員養成と教育学研究は密接なもの」というスピリットは、あのころの教育学科に共有されていたと思います。私は大学院指導のほうが自分に向いていると思っていましたけれど、小学校に挨拶に行ったりして、研究授業を見たりしていると、もうすっかりそっちにはまる気持ちもありました。ですから立教の5年間は忙しくなかったなんてことはなくて、でも今から思えば生きがいになりましたね。

松平 私の見るところですと、寺崎先生のいらっしゃる5年間で、内容は別として、教育活動上で学科に大きな影響を与えたのはゼミ活動だった



寺崎昌男

と思います。先生は学部のゼミに力を注がれて、学科全体でゼミを重視するという雰囲気をつくり出されたと思うんですよ。それまでもゼミはあったけど、寺崎先生の力の入れ方とはちょっと違ったと思います。

僕が学生の頃はほとんどなかったし。

寺崎 学生たちからすると、さっき上田先生がおっしゃった現場の教育、現場の体験、自分が見てきた眼で文献をつなぐ、という雰囲気は、学生たちに非常に合っていた気がする。

圧倒的に松平先生と上田先生のゼミに人が集まったでしょ。お二人のところにまず集まって、そのつぎが寺崎や室さんというふうにくる感じがしますね。ゼミの人数からみると、あの頃の教育学科の雰囲気は、非常に立教に適合していたような気がします。

上田 寺崎さんは、業績からみると厳めしい感じがするけれど、実際には柔軟で創造的であるという、それが大きかったと思うんですよ。だけど東大にとられちゃって、その代わりに中野さんにきってもらって。中野さんは現場に近いものをもっていたからずっとつながってきたわけですよ。

そのあたり運がよかったというのかね。教育学科の成長としてはよかったと思うんだけどね。

学生の気質

前田 1970年代まで、いろいろお話をうかがってきたのですが、1980年代になって新しいメンバーとして中野光先生、そのあと藤田昌士先生に加わっていただいたわけですが、中野先生は和光大学から1979年にいらっしゃいました。和光大学といえば大正自由教育の研究者の中野光先生という強いイメージがありました。和光から立教にこられて和光文化と立教文化に違いがあったのではないかなと思うのですが、そのあたりいかがですか。

中野 私が和光大学から立教大学へ赴任したのは1979年の4月からでした。じつは私は「10年転任論」者を自称してしまて、金沢大学に在職したのは10年間、和光大学にも10年間お世話になりました。ですからその後のことは多分浪人生活をして研究に専念したい、と願っていたと思います。立教へお世話になりたい、と思ってもいみませんでした。先輩の浜田陽太郎さんが、「自分の経験からいっても浪人生活というのは経済的に大変だぞ」と言ってくれたことがあり、若干の貯金だけは準備していました。そんな私が立教大学に転任できたのは、寺崎さんが東大へ転出され、立教大学の教育学科の教授ポストに空席ができたからでした。私の立教大学への転任が実現したのはまずは室俊司さんからの提案があり、浜田さん、上田先生からのご支持もあったからだ、と思っています。

もちろん、私は立教大学へはよろこんで参りました。私にとって、立教大学の魅力の一つは教育学科に初等教育教員養成課程が含まれていた、ということでした。これは当時の私立大学ではめずらしいことでした。いわゆる六大学の中にも先例のないことでした。私は教員生活のふり出しは桐朋学園で、小学校1年生から4年生までの担任教員の経験をしたことをひそかに誇りに思っていましたし、実際、自分には小学校の教師生活がいちばん楽しかったのです。多分、私の教員としてのセールスポイントは小学校の教員なら、野球選手でいうと「即戦力」の教師だったと思われます。

今日、教育学科50年の歴史を振り返って、先

輩格の諸先生からお話をうかがって改めてわかったことがいくつもあります。第一は、私が学科のメンバーに加えられた1979年までは、いわば学科草創期であり、相当の苦難の前史が積み重ねられていたのだ、ということです。私が楽しく活動できたのも、先輩の先生方、学生、院生諸君の努力の積み重ねがあったからでした。転任当初、私には和光大学における一種の「たたかい」ともいえる苦勞もあったせいで、あとから振り返るとずいぶん厳しい振る舞いもしたと思われます。ですから、もっとやさしい指導が求められていたのに……、と反省しています。もっとも立教大学の学生には他大学の学生に比べると、教員に対する「甘え」のような雰囲気もあって、私から怒られても仕方がなかった、という事実もありましたね。でも今にして思うと、私とのあいだで「事件」を起こした人も卒業してから教師として格別に成長し、しばしば学級文集や研究会で発表した冊子等を送り届けてくれ、著名な民間教育研究団体から受賞の対象となられた人もいました。結婚式にも招かれ、間もなく赤ちゃんが生まれたとき、「先生のお名前をつかって『光』（あきら）といたしました」と報告してくれたことがあり、思わず笑ってしまいました。

大学院での共同研究では『帝国教育会の研究』を冊子としてまとめ、「私立学校の歴史」に関する個別研究も学科からの財政補助金をもらって活字にすることができました。私の立教大学時代の研究は、すぐれた学生・院生との協同があってこそまとめることができました。「研究と教育との統一」という実践的原理は和光大学と立教大学と中央大学を通じた私の実践を貫くものでした。そのことの証（あかし）として研究成果は現在の私をも支えてくれている、と思っています。

なお、私は立教大学に在職したからこそできた研究がいくつかありました。その多くは学科の研究年報に発表させてもらいましたが、私のライフワークとしての「大正自由教育の研究」はいわゆる大正デモクラシーという歴史潮流の中で展開された教育改革運動なのでした。私はその歴史土壌の上で研究を行うことができて幸せでした。

もう一つのことを加えさせていただきますと、立教大学にはミッションスクールとしての歴史遺産が豊かにあって、1980年代に発展した国際的研究交流の恩恵を受けることができたということです。

個人的なことに話が及ぶかと思いますが、私は80年代にアメリカ聖公会の関係で、ペンシルバニア大学で、日本の大学改革の研究で学位論文を書くプロジェクトをもって来日されたJ. バレッタさんという方の研究に協力することができました。このことは私のほうが貴重な国際的教育研究を深める機会を与えてもらったことになりました。また1980年代には数回にわたって中国教育研究のために訪中の機会を与えてもらいました。88年のことだったでしょうか。松平さんと一緒に北京と重慶で開催された国際シンポジウムに参加し、また中国教育工会の方明主席には立教大学にも立ち寄ってもらい、友好的研究会を大学院生を交えて開催できたことは忘れ難い思い出です。

寺崎 僕は立教にくる前に、立教も含めていろいろな大学で非常勤をやっていましたが、そのなかで断然報酬が悪かったのが、立教でした。でも立教では一度も嫌な思いしたことがない。しかも学生がとても素直なんです。辞めようと思わなかったのは、立教だけでしたね。学生の気風はやっぱり大変魅力的でしたね。

前田 学生については、いわゆる偏差値とは別の観点から、たとえば学会大会なんかやると手伝いのアルバイトの人たちが一生懸命やってくれる、その姿に他大学の先生には大層好感をもっていただき、また感心もしていただきました。立教大学の学生の気質かなと思うのですが、そのあたり松平先生どうでしょう。

松平 外部の非常勤の先生が「立教の学生っていいね」と言ってくださって、「あ、そうなんだ」と教えられたことがずいぶんありますね。前田さんたちと立教を卒業して教師になった人たちのフォローをずっと続けていますけど、そのなかで言われるのは、ほかの教員養成系の大学と比べて、とても柔軟性があるとか、幅広いかということです。たしかにそういえると思います。それから学科の15周年に上田先生と座談会したとき、先生がしき



藤田昌士

りに言っておられたのが、立教の学生は「揺れ」があって、しかしそれがいいと。頼りないけど、「揺れ」がいいのかなって。

上田 初めの頃の感想ですが、それは変わらないかな。ある意味自然な感じがするの。努力してないとは言わないけど、そのやり方が無理していないのですよ。それはサボっているという意味じゃないからね、自然にそうなるので。大学全体の感じがそうですね。先生方もいろんなことを勝手にやるし、ほかの大学ではいろいろ難しいですね。立教だってでたらめでいいわけじゃないけど、その幅ってというか「揺れ」は、貴重だと思っていますね。なんとなく頼りないとか弱々しいという感じはあるけれど、それは世間でいうようなものじゃなくてね、手応えがあると思うんだ。

松平 最近はどうなのでしょう、有本先生。

有本 先生方がおられた頃と学生が変わってきているのかなという気もします。まずは定員が増えていることもあります。今は定員100名ですけれども、何年かは115名定員でしたので、130名とか140名とか学生が入ってまいりまして、それこそ初等教育課程をどう運営していこうと模索しております。

学生に関していえば、先生方が言われていることが基本ラインにあるのかなと思います。いい意

味でちょっと頼りないという「揺れ」があるかなと感じています。

前田 そうですね、素直なところもありますし、「揺れ」とか「はみ出し」とかいろいろある学生もいますが、立教の教育学科の雰囲気の中で一人ひとりが大切に育てられるところで一貫しているような気がします。学科定員 60 名のときは学生の名前を全員覚えられましたけれども、130 名なるとなかなか覚えられませんね。先生方の時代は、一人の学生を複数の先生方が本当によく見てくださったという実感がありました。しかし今は、一人の学生をせいぜいゼミの先生がみるくらいで、学生一人ひとりに対する視線がちょっと弱くなったという気がします。

学会大会の開催と学科行事

前田 藤田先生には大学院の非常勤講師を長くやっていたいて、いつ立教へこれられるのかと思っていたのですが、1980 年代の後半から加わっていただきましたね。

藤田 私は1989年度から1998年度まで10年間お世話になりました。本当はもっと立教にいたかったのですが、65 歳で定年退職いたしました。その前にも 1980 年前後からでしょうか、大学院で教育方法特殊研究を担当し、生活指導論を中心にいろいろ考えたりしました。授業もちゃんとやったつもりですが、「課外活動」の思い出が残っています。

私は東大で紛争が始まる前に国立教育研究所に転任しましたので、紛争を体験していないんですね。国立教育研究所という世界で研究をしています。学生諸君との濃密な接触は立教での教育方法特殊研究がはじめてでした。なんて人なつこいのだろうという印象がとても強いですね。1989 年に私は着任したわけですが、その 5 年前にも立教にこないかというお誘いをいただきました。しかしそのときは福島大学に大学院を設置するために行く約束をしまして、本当に残念だったのですが、辞退させていただいたのです。ただいつも

でも福島にいるのは妻の仕事の関係上難しかったので、5 年後に立教にポストを与えていただきました。それについては室先生や中野先生や松平さんにご配慮をいただきました。それで 10 年間お世話になったんですね。

今日の座談会のことをうかがって、立教在職当時なにがあったかと、古いフロッピーを取り出して読みましたら、ああこういうことがあったと次つぎに思い起こしました。とくに卒論指導を中心とする学生との交流が心に残っています。八王子の大学セミナーハウスや文部省の宿舎の青雲荘、それから妻の絵とかを保管している山小屋でゼミ合宿をやったことが、なんといっても懐かしい思い出ですね。そのときに学生の皆さんと少しでもいい卒論を作るために、どういうテーマにするか、第一次案、第二次案はどうかと合宿を中心にして侃侃^{かんかん}諤々^{がくがく}やりました。

それから 1993 年に日本教育学会の第 52 回大会を立教でやったことも忘れられない思い出です。日本教育学会の当時の会長の大田堯先生から立教でやってもらえないかという電話をいただきまして、松平さんにこういう依頼があったんだけどどうしようと言ったら、「断れないでしょう？」って。それで第 52 回大会を室実行委員長、藤田事務局長で行うことになりました。助手の稲田素子さんにはご負担をおかけしたと思います。とにかくおかげさまで第 52 回大会を開催できました。

寺崎 悪天候でしたね

藤田 ほんとに大荒れでした。先ほど学生の気質というお話があったので思い出したのが、大会が終わったあとの打ち上げの盛り上がりです。協力してくださった学生の皆さんが、大会が無事に終了したことを自分のことのように喜んでくれてね。僕はあとにも先にもあんなに盛り上がったパーティーっていうのは覚えていませんね。途中停電もありましたしね。

あわせて言いたいのは、私は 1996 年度に研究休暇を頂戴しまして、カナダ・アメリカ・イギリス・ドイツへの海外出張に出かけました。わずか 10 年の在職期間中にそういう機会を与えていただいて本当にありがたく思っています。

それから室先生に関して、1997年の日付でセミナーキャンプのことを書いた一節がありました。「今年3月定年で退職された室俊司先生がわざわざ見送りに来てくださったことを特筆しておきたいと思います。聞けば室先生は1996年度に担当された教育学の授業で当時の1年次生の諸君に君たちがセミナーキャンプに行くときには見送りに行く」と約束されたとのこと。小生の記憶によればお世辞にも朝は早いとはいえない先生が午前9時前にはタッカーホール前に来てくださった。立教大学の学生諸君をこよなく愛された室先生ならではのことと感謝しました。」

前田 藤田先生、大学院のコンパで「立教を道徳教育研究のメッカにする」と宣言されたことを覚えているんですが…

藤田 そうでしたね（笑）。そのくらいね、立教に想いをこめていました。ですから私にとって65歳で定年っていうのは早かったなあと。

前田 1993年の日本教育学会のテーマが「共生と教育」。共生という時代のキーワードをいち早く取り上げ、環境問題に詳しい法学部の淡路剛久先生をパネラーにお迎えをしたりして、いろんな角度から分析しようというのは、室先生のセンスなんですよ。そういう意味では室先生のセンス、学問的センス、時代を見抜くセンスには、今さらながら感心させられます。

藤田 そうですよ。全体シンポジウムも室提案で共生というね。共生は、生物学の用語でもあるわけですが、Living Together っていう意味でね。

それと第52回大会のテーマの一つに、生徒参加論をとりあげました。私が生徒参加に関心をもっていたものですから、日本教育学会としては初めて課題研究としてそれを企画しました。喜多明人さんと竹内常一さんとかに提案をお願いしました。この二つは立教大会らしさだったかもしれませんね。

前田 セミナーキャンプの話が出ました。学部2年生が企画をして、1年生を夏休みに2泊3日キャンプに連れていくものでしたが、松平先生は初期の頃から知っていらっしやるわけですね。

松平 そうですね。ちょうど室先生が学科長にな



松平信久

られた1978年に、1年生全員を集めて合宿のオリエンテーションキャンプをやりたいと提案されたのです。それで実現に向けてかなり一生懸命にくふうしたのですが、予算の問題とかで教育学科だけでやるのは難しかった。そこで学生のほうに呼びかけて、セミナーキャンプを行いました。実際は学生が企画したんですけど、それから始まったわけです。1979年が最初でした。その後20年間続いたのかな。

前田 そうですね。1998年が最後でしたね。学生自身の活動という、山越ミネ先生が定年退職をされるときに、音楽の先生なので音楽でお送りしようと言ったので始めたんですね。1993年のことです。初等教育課程の人たちが中心になって今でも行われていて、今年で20年目になります。学生自身がいろんなことを企画して相互に交流していくというのも、教育学科の一つの伝統なのかなという気がします。

カリキュラム改革について

前田 つぎに1980年代の年表を見ると、1989年に教育学科が教育方法を中心にしてカリキュラ

ム改革を行います。松平先生、その精神というのはいかがなものだったでしょうか。

松平 それまでは細谷先生、上田先生、中野先生など、教育方法に関する日本を代表する方がおられたので、とくにテーマを立てなくてもおのずと学科の特色というのは出ていたと思います。

しかし1984年に上田先生が退職された頃から、改めて学科としての中心テーマを何にしたらいいのかを学科で議論したわけです。あの頃は毎年夏に教員の合宿が行われていました。そこでも学科としてのカリキュラムの柱を何にしたらいいかを議論した覚えがあります。1980年代の半ば、私が学科長をした頃だったと思います。その議論を受けて、これまでの伝統を生かしつつ改めて学科としての中心課題を教育方法と設定しました。その際も、いわゆる狭い意味でのhow toとかではなくて、もっと教育学全体に通じる教育方法の在り方を視野に入れた、広い概念としての教育方法を学科の特色として位置づけたのです。そのなかには当然、理論と実践の総合ということもありましたし、初等教育を学科のなかに位置づけるということも意識しながらカリキュラムを編成したと思いますね。

前田 そのカリキュラム改革では、文学部のなかの教育学科というメリットと、教育学科のなかにある理論研究と実践研究という、ある種の立教らしさというものが実現されていたと思うのですが、2006年以降、大学自体に大きな変化が押し寄せてきます。私はそのとき文学部長としてとても苦しい経験をしました。

たとえば文学部の授業展開コマ数が多すぎるので、全学で教学条件を設定しようことになりました。経済学部、法学部、文学部それぞれ基準を決めてコマ数の枠設定をしようということから始まって、経営学部や現代心理学部といった新しい学部をつくりながら、文学部の学生定員を増やして経営的に安定させようという流れのなかに教育学科が巻き込まれていくのですね。

その結果、2006年のカリキュラム改訂で卒業論文も選択制になりました。そのカリキュラムを作っていたいただいたお一人が有本先生です。それはご

苦労だったと思うのですが、いかがでしたでしょうか。

有本 とくに卒論に関しては、また必修に戻すことができれば一番いいなと思っています。いろいろな科目を整理しないといけないのが、大変でした。初等の免許法で決められた科目は残さなくてはいけません。一方で教育学専修の人たちも、もちろん大切にしないといけない。そのなかで科目をどこまで開くのか、どこまでしか開けないのかで、とてもジレンマを感じました。卒論は私も非常に大事に思ってきたので、それを必修で残さないのはとても辛い思いでした。どのようにしたら卒論を必修にできるのか、あるいは卒論をたくさん書いてもらえるように仕向けていくのかが、一番の課題と思っています。

前田 半期制が導入され、前後期の試験の採点が倍になり、いろんな事務作業が教員に下りてきました。学生数が増え、その負担も増加しました。それでも立教らしい家庭的な雰囲気をどうやって維持するかで、我々は苦労しています。

一方で、初等教育課程というのはものすごく負担なんですね。かつては教育実習校の小学校も1校で2～3人面倒を見てくれたのですが、最近はどうもほとんど1校に1人しか受け入れてもらえません。そうすると実習校を訪問する回数も多くなって、かつ教育実習を大事にしろという東京都の行政の指導があって、教員養成をどうやって位置づけていくのかという難しさも顕著に出てきました。

学科長のお立場で、教員養成の難しさはどういうところにあるとお考えでしょうか。

有本 私自身は初等教育課程があることが一番の魅力でここに来させていただきました。音楽だけではなくてほかのところも担当させていただけるのが、とてもありがたいと思っています。

学生にとっても3年次から課程が選択できるのはすごくいいシステムだと思っています。初めから国語科だとか、中学の免許とか、決めて入るのが国立の教育学部ですけれども、ここは入ってから決めるまでの期間があって、とてもいいなと思っています。でもそれは運営する側からはとても

難しいことです。初めから区切っていれば、初等50人と募集をしていれば、もっと運営上は楽だと思うんですね。それをあえて選べるところに魅力があると思いますが、支えていくのは大変だと思います。お話を聞いていて、初等に対する理解を得るのが難しいのは今に始まったことではないとわかりました。初めからすごく大変なことだったのだと、だから本当に頑張っていかなければいけない、襟を正していかなければいけないというふうにかがいました。

それから前田先生のお話にあったように、文部科学省の方針が厳しくなっているのと、加えて東京都の教員養成カリキュラム、とくに初等教員に関するカリキュラムがとても厳しくなっていて、実習に非常に厳密な対応を求められています。これに対して教育学科が、どのように力を配分していくかは大変に悩ましいことなんですね。初等教育の学生だけでなく、教育学専攻の学生もいますし、大学院もあるわけです。何かこういうふうに頑張りをなさいというアドバイスがいただけると、とても励みになると思います。

教育学科への期待

前田 文科省の大学行政は基本的には規制緩和と政策なのですが、唯一例外的に強化されているのが教員養成政策という状況のもとで、教育学科は50周年を迎えました。教育学科の伝統として何を継承すべきか、これからの教育学科に何を期待するかを一言ずついただきながら、この会のまとめとしたいと思います。まず、上田先生いかがですか。上田 僕は年を取ったのかもしれないけど、大学っていうところがよくわからないですよ、今。新聞を読んで大まかな見当はついて、実際の個々の大学の状況は、今までの尺度じゃ測れない何かが出てきて、大学の置かれた位置の難しさと、今の大学と教員を考えたときに、何ができるかということがわからない。今聞いたようなこまごまとした変化は、私の理解の外にあるし、我々がイメ



有本真紀

ージした大学とは違ってきている。違うから悪いというわけじゃないけど、クリエイティブじゃないのだけど、クリエイティブという方向に動いているのかどうか分からない。それは大学の教師だけじゃなくて、学生にとっての問題でもある。大学生の置かれた位置、もっというと今の若者にどういう状況が開かれるかという問題と、大学の将来という問題は、非常に重大な関わりをもっているのだけれども、どちらも？(クエスチョンマーク)であって、それを打開していく、つなげていく何かができつつあるのかがわからない。

立教は立教らしくその辺のところを開拓すべきだが、大学としての学びや検討がどれだけ可能になるか、その辺も僕にはよくわからない。伝統のある大学がどうなっていくだろうかもわからない。そういう時期にきているような気がする。私は遠くから眺めているにすぎないが、大学の問題は社会の問題や人間の問題と結びついているのであって、そのあたりについて今何もフィロソフィーが出ていないのだと思うんですよ。大学が大学だけで在り方を処理していくことは、現状としてやむをえないかもしれないが、結局マイナスの方向に行くような気がする。その辺を探求しながらやっていただきたい。気持ちとしては、ユニークなよ

い体制をただ維持するというより、さらに創り出したいだけけれども、大変ご苦労だなという思いです。

中野 まったく同感ですが、より具体的には、卒論を必修からはずすとすると、その代わりに新しく課題を設けなくてもよいのか、という問題についてはどんなことが論議的になったのでしょうか。教員や学生にとって厄介な荷物になる、ということではなく、より積極的な課題は何か、と問うことが大事ではないのか、と思うのです。

私は立教大学の次に赴任したのは中央大学の教育学科でした。そこでも卒論は必修科目でしたが、その拘束力はややゆるやかでした。実際には内容を自由に考えることができました。規定の枚数も立教より少なかったような気がします。立教大学教育学科のばあい、卒業論文の代わりに卒業制作とか卒業演奏とかの発表会があってもいいじゃないか、うんと楽しい企画に代えてもいいじゃないか、外国の小学校の参観記録が写真代わりで発表されてもいい。とにかく、立教大学教育学科にふさわしいプロジェクト学習が創造されるとおもしろいが……。

寺崎 現在の構造は、大学が世間の評価、ソーシャル・ニーズに応えるために、いろいろくふうしなくてはならず、それで忙しくなるというものです。そこで結論からいうと、そうしたニーズを溶かして、重要なポイントで踏みとどまる、スローガン風というと「溶かして踏みとどまる」力を現職の先生方に養っていただきたいと思います。

たとえば「溶かす」というのには、偏差値体制があるわけですよ。これは世間が大学に押しつけている一つの価値観になるわけです。そういうものと対決するのでもなく、無視するのでもなく、「溶かす」にはどうしたらよいのか。偏差値が低いとか、中ぐらいとかといわれる学生たちに何が残っているかを探求していくことも、「溶かす」ことの一種だと僕は考えます。僕の経験からいうと、立教の学生がよかったのは、鍛えていけば伸びることです。ところがそういうチャンスに恵まれなかった学生もたくさんいる。そこところで世間の尺度を溶かしていく、そして大事なところで踏み

とどまっていくことをやっていけばいいわけです。世間からは、大学がどこで踏みとどまるかについて注文がいっぱいきます。今の中教審がいている主体的な学習など、それこそ教育学者が戦後60年間言い続けてきたことで、今さらいわれるようなものではない。踏みとどまり方にも見識と力があると思いますね。それをぜひ頑張っていただきたいと思います。

それから僕は、立教の方、とくに立教出身の方に、もっと頑張って立教のいい点を見つけ出していきたいと思います。立教のいい点は、三つぐらいの現象に表れている気がする。一つは存在としての学生が大事にされている。これは、日本の大学にあんまりないことです。よそで大事にされるのは、将来の労働力としての学生、つまりキャリア教育の対象になるような学生です。しかし立教の先生は、学生のことをすごく熱心に考えておられます。二番目は、職員の人たちが職名で呼び合うことがない。部長とか、課長とか言っているのを、一度も聞いたことがないです。これはやはり神の前の平等というところから自ずとできてきたもので、一朝一夕に作れない校風だと思いますね。三番目はシンポジウムで金をとらない。ぜんぜん金をとらないでしょ。申し込みも受付もないでしょ。どうぞご自由につて。どうしてかよく考えてみると、学校が教会だからなんですね。立教大学全体が建物としては大学・学校だけどじつは教会なんですよ。料金を取る教会はないわけです。そういう点では、建学の理念というのもあるけど、やっぱり大学のなかに独特の体質があって、それが建学の理念の表われなのだと思いますね。その点は育ててほしいな。そのためには、溶かして踏みとどまることが大事だと思いますね。

藤田 さきほどの学生定員130人体制は、卒論指導の観点からはきついと思いました。私のときも卒論指導では15人前後を担当しました。それにほかの方が指導されたのも含めて、卒論面接では20人ぐらいを担当しました。2月あたりはどうやって生き延びようかと思うくらい忙しかったという思い出があります。ましてや130人となると大

変だと思います。教育学演習や卒論指導演習は、もっとも濃密に学生と交流できる場です。私は経済学部出身ですが、卒論の制度はないかわり、ゼミでレポートを書くことは不文律で、それが中野先生のおっしゃった一種の卒論的なことでした。4年生のゼミで100枚ぐらいのレポートを書きました。そして指導の先生から、卒業後、コメントされたものを送り返してもらいました。今も大事に持っています。ですから教育学演習などの場を中心にしながら、学生との濃密な交流を大事にしてほしいと思います。大変でしょうけれど、そういう期待はございますね。

それから文学部には文学部集会という、次年度のカリキュラムについて学生の意見を聞く場があります。私は参加の問題に関心があるものですが、これはいい制度だなと思いました。ただもう少し基礎集団というか、学科なら学科で討論しながら全体場で集まったらどうかという注文はありましたが、とにかく個々に有志が集まってきて、来年度のカリキュラムについて意見を述べるという場は大事だと思います。あれは紛争の産物でしょうか。ほかの大学では、紛争がどういう果実を残したのかが問われるわけですが、立教ではその果実があるということです。これは大事にしていきたいと思います。

最後に文学部には、集中合同講義という学科を超えた合宿ゼミがありましたよね。私はそれでキリスト教学科の先生や心理学の先生とご一緒に、共通テーマのもとに講義をしました。お世話役は仏文科の職員さんでした。非常に印象深い機会でした。そういう学科を超えたカリキュラムも大事だったというのが、私の体験です。

松平 卒論面接は教師が複数で行いますよね。僕なんかは、それですごく緊張するんですよ。上田先生と組んで学生に質問するときなどは、学生が質問されているというより、僕が質問されているような気分になる（一同笑）。つまりどういう切り口で質問するかで、僕はすごく勉強になった。学生が増えると同時に、教師も増えます。それにともない、教師間のコミュニケーションや勉強の機会をどうつくっていくかが重要だし、すごく難し



前田一男

いと思う。ちょっとアナクロニズムになるかもしれないけど、私たちの頃は、必ず学科会のあとに飲み屋に行っていました。それから浜田先生がおられたときは、学科全体で科学研究費をもらって研究しました。ああいう教師集団のまとまりを作っていくのは、一つあるかなと思います。

それから僕も長らく思ってきたし、寺崎先生も強調しておられましたが、教育学科が創立以来ずっと文学部に属していることは非常にメリットではありますが、今日の状況のなかでそれがいいのかは、抜本的に再検討しなければいけないと思う。教育学科が文学部にどれだけ貢献できたかも含めて、学部のなかにある学科の在り方を、改めて考えてもいいのかなと思いますね。

それからもう一つ、私は学院長をしていて、学院のなかで、教育学科にいろいろ発信してほしいとか、受け止めて欲しいという声を、小学校の先生とか、中高の先生方にあると感じました。学院のなかにある教育学科ということも少し意識して、学院のなかでのコミュニケーションの在り方も教育学科に組み込んだ形で考えていただけるとありがたいと思います。

寺崎 私も昔は、立教の教育学科は文学部のなかの教育学科だからいいんだと、だからいい学生がちゃんと育っている、それはリベラルアーツの教養を基本にしてプロフェッショナルを養っていく

からだと言っていたのですが、そういう状況はちょっと変わってきたのかなと思います。全学共通カリキュラムなどなかった時代と違って、今は全学でリベラルアーツの教育ができる時代だから、制度的に教育学科が文学部のなかにいなくてはいけないという必然性はないと思いますね。

それから全学および学部に対する貢献という点からいうと、私はもう一つ大学院の研究者養成にウェイトを置いていただきたいと思います。学内にはいくつものアルバイト的な臨時職があります。専門職です。たとえば大学教育開発支援センターには学術調査員の募集枠がある。そしてそれらには、よその大学院の卒業生も受け入れています。僕は立教の院生にとって惜しいことだと思う。今この就職難の時代にどうして教育学科の大学院卒業生がああいうポスト研究施設の公募を受けてくれないのかと思いますね。ぜひ教育学科の先生のなかで、学内の公の仕事に貢献できる院生を育てていただきたい。前田 宿題をたくさんいただいたような気がします。

有本 本当に重たい宿題がたくさんという感じです。なるべくお言葉を活かしながらやっていけた

らと思います。

前田 私は立教の教員になって22年目を迎えました。リベラルアーツの精神に立つ教員養成、キリスト教の精神にもとづく社会的弱者へのまなざし、研究者としての教師という三つのコンセプトで、どう学生を育て、自分を育てられるのかを自覚しながら、学生と向き合ってきました。その意味でも、今日室先生の話が期せずしてたくさん出てきましたが、ここにいらっしゃらないのが本当に残念です。室先生からいつも聞いていた東京大空襲と大学紛争の話がご自身の哲学となり、学生と対する時の「促し、励まし、見守り、支える」といったスタンスになっていたことを改めて感じました。

時代がどんどん変わっていくなかで、上田先生がおっしゃったクリエイトできる哲学をどうつくっていくのかも大きな難しい問題です。学科教員、チームワークをもう一度作り直して、これからの50年をめざして頑張っていければと思います。またいろいろとご指導いただければと思います。

本日は長時間、ありがとうございました。